第14回 モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2014年5月6日(火)

◆開演◆14:00◆

— 会　場 —

ザ・ハーモーニーホール／小ホール

(松本市音楽文化ホール)

主催／モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

後援／松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・信濃毎日新聞社
SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・あづみ野エフエム放送・(公財)八十二文化財団

よこしまかつと

モーツァルトにとってピアノの存在とはどんなものだったのでしょうか？
あの映画「アマデウス」のエンドロールで流れる美しい名曲、ピアノ協奏曲20番がついに全曲演奏会に登場します。あの名曲はどのようにして生まれたのか。
そしてピアノとの関係は？この第14回全曲演奏会で探っていこうと思います。

【モーツァルトとピアノ】

モーツァルトがピアノ（クラヴィーア）という楽器に接していたのは、音楽史家バーニーが言うような「（鍵盤の）端っこで音をひっかき鳴らして」いた楽器から、ちょうど現在我々がピアノととらえているものへと発展しつつある頃のことであった。
演奏家として、また作曲家として訪問したヨーロッパの諸都市で、彼はさまざまな鍵盤楽器と触れる機会をもつことができたに違いない。

【モーツァルトの鍵盤奏法に対する考え】

モーツァルトのピアノ・ソナタや協奏曲を見てみると必要な技術は初期から後期の作品にいたるまで、ほぼ変わらない。これは、モーツァルト自身、幼少の頃から並外れた技量を身に付け、それがずっと変化しなかったことを示唆するものであろう。
彼の手紙には、この楽器の演奏法についての鋭い洞察がしばしば語られている。
たとえば1783年6月7日、姉ナンネルに宛ててモーツァルトが説いたのは、軽やかな手、しなやかな手首の必要性、そして滑らかな敏捷性を失うことのないように、ということであった。

「だって、6度や8度思いきり速く弾いたところで（そんなことは誰にも、クレメンティにだってできやしません）、それが一体なんだというのでしょう？　ただぶっ叩くような音が出るだけです」

そのほかにも、クレメンティの機械的ながらも気取った演奏に対する批判、G.J.フォーグラーの、モーツァルトのピアノ協奏曲の息急く演奏への批判、さらにまたマリーア・シュタインのひどく気取った演奏ぶりを面白おかしく描写した手紙もある。

これらの手紙でモーツァルトは、精巧な技術よりも「趣味」、「感情」そして「適当な正確さ」に重きを置くピアニスト像を築き上げている。
1777年11月22日付の父レーオポルト宛の手紙には、「ご存知の通り、僕はむずかしい技巧を特に好む者ではありません」と書いている。
こうした言葉が出てくるのは、彼がもっとも敏感な年齢にして、すでにピアノ奏者としての「困難さ」をマスターしていたからであり、だからこそモーツァルトは（確かに彼のもっとも優れた鍵盤曲でも）緩徐楽章に高い評価を置いていたのである。
「ゆっくりと弾くよりも速く弾くほうがずっと楽です。パッサージュのなかのいくつかの音符を見落としたって、誰も気づきません。でも、それが美しいでしょうか？」

【モーツァルトのピアノ協奏曲】

モーツァルトの協奏曲はピアノのためのものとヴァイオリン（第3回、7回、12回全曲演奏会プログラムノート参照）および管楽器（第4回全曲演奏会でファゴット、9回オーボエ、10回フルートを演奏）のためのものとに大別できる。
とりわけピアノのための協奏曲は、モーツァルトによって新たに創りだされたと言っても過言ではない。モーツァルト以前のピアノあるいはチェンバロのための協奏曲は数の上からも非常に少ないし、よしんば作曲されていたとしても一人の作曲家の中でこれほど重要な意味をもつことはなかった。また、形式や構成原理の点でも、モーツァルトのピアノ協奏曲はバロック的書法から完全に脱却しており、彼以降の作曲家の手本となるような、真の近代的な協奏曲の形態が、モーツァルトの手によって完成されたと言えるのである。実際、モーツァルトは生涯を通して30曲ちかいピアノのための協奏曲を作曲したが、その中で交響曲に比肩できるほどの構成原理を打ち立てたのである。

ピアノ協奏曲は、主としてモーツァルト自身やナンネルや弟子たちのために作曲されたものだった。とりわけウィーン時代には、モーツァルトがこの楽都の音楽界

にデビューし、音楽家としての地歩を固め、生計を立てていく際の重要な手段として、ピアノ協奏曲が利用されている。例えば、1784年から86年の冬の各演奏会シーズンには、集中的に12曲もの協奏曲が目の前に迫った演奏会のために作曲されている。それらは、楽想の点でも作曲技法の点でも1曲1曲がきわめて個性的であるばかりか、なかには当時の協奏曲に対する概念の枠をはるかに超えた内容のものさえある。もう1つ、考えに入れなければならない重要な要素がある。それはウィーンにはオペラのオーケストラからピック・アップした優秀な管楽バンドがあったことである。

モーツァルトのウィーンでの十年間に書かれたピアノ協奏曲の輝かしいシリーズでは、彼は全く独自に新しい形式を生み出している。それは史上最初の真にシンフォニックな協奏曲である。そこでは管楽器のグループが、基本的に重大な役を担うようになり、時には弦楽器もピアノも沈黙して、管楽器だけのソロ・セクションが繰りひろげられることがある。

しかし、領域の拡大はそうした技術上の問題だけにとどまらず、表現の面にも及んでいる。モーツァルトは一方において、彼が華麗でセレモニーふうの気分を表わすときの調性であるハ長調でトランペットとティンパニを伴って、極めてシンフォニックな作品を作るかと思えば、(KV413、KV503など) また一方においてはC・P・E・バッハ (J・S・バッハの息子) 以来の、ずしりと重い短調の作品 (ニ短調KV466　今回の全曲演奏会で演奏、ハ短調KV491) を生み出したのだったが、これらの短調作品には恐ろしいパワーとドラマが内在されている。

それとは別に、室内楽のように繊細で、薄絹の美しさをもった曲もある (イ長調KV414並びにKV488の第2楽章など)。
さらに特筆しなければならないのは、それらの協奏曲群や楽章群が、彼特有の、悲しみでもなければ幸せでもないという、謎の言語で書かれていることで、それはモーツァルト作品の魔術的で自足的な情緒の世界のものであり、われわれは彼の許しを得て、そこに入れてもらえるのである。

●ピアノ協奏曲　ニ短調　ＫＶ466

Konzert in d für Klavier und Orchester KV466
（29歳　1785年2月10日　ウィーンで作曲）
Allegro, Romance, **Allegro assai*

KV466は、ピアノ協奏曲の絶頂期に書かれた特筆すべき作品である。それは、短調で書かれている、というだけでなく、シンコペーションで始まる第1楽章の陰鬱な出だし、変ロ長調の第2楽章での突然にフォルテで奏される短調の中間部、第3楽章の激しい上昇主題、そして独奏ピアノとオーケストラとの緊密な関係等には、従来の協奏曲には決してなかった書法が認められているのである。
当時の協奏曲は、常に明るい長調で書かれており、独奏者を引き立たせ、演奏技法を披露するための、華麗で肩のこらない社交的雰囲気を漂わせた作品、というのが一般的な相場であったが、ニ短調のこの協奏曲にはそうした性格は微塵も見られないのである。
ベートーヴェンはこのニ短調の協奏曲を愛奏したといわれており、第1楽章と第3楽章用にカデンツァを残している。
＜今回はモーツァルト自身が残したカデンツァを演奏予定＞

【短調の作品】

以前短調の魅力をこの全曲演奏会でも取り上げた。（第10回全曲演奏会プログラムノート参照）彼のニ短調の作品といえば、「レクイエム」や「ドン・ジョバンニ」、弦楽四重奏の「ハイドン・セット第2番」などが頭に浮かぶが、一様にきわめて個性的で激しい感情表現を行っており、それぞれ各ジャンルでも特異な場を占めている。この協奏曲も同様である。
作曲家として、またはピアニストとして生き生きと活動していたこの時期に、モーツァルトはあえて厳しいニ短調を選んでいるのである。この協奏曲も、モーツァルトの心奥に潜む、とある一面を伝えている。

*モーツァルトは３楽章の速度表示を書いていない。

PROGRAM NOTE

【レーオポルトのウィーン来訪】

このKV466、二短調の初演に父レーオポルトが同席していたことが、レーオポルトが娘ナンネルに宛てた手紙に記されている。
この手紙の内容から当時のモーツァルトの演奏会の様子や活動内容がうかがえる。

・・・到着当日の晩にはあの子の最初の予約演奏会に出かけましたが、身分の高い人たちがたくさん集まっていました。・・略・・演奏会はまことに素晴らしいものでしたし、オーケストラも見事でした。いくつかの交響曲のほかにイタリア語劇場の女歌手がアリアを二曲歌いました。それからヴォルフガングの素晴らしい新作のクラヴィーア協奏曲がありましたが、私たちが着いたときには、写譜屋はまだそれを書き写しているところだったし、おまえの弟はロンドーをまだいちども通し弾きしてみる時間がなかったのです。彼には筆写譜に目を通す必要があったからです。・・略・・

この手紙の中であのヨーゼフ・ハイドンに会ったこと、そしてこんなうれしい言葉をかけられたことも誇らしく書いている。

・・・ハイドンさんは私にこう言われました。「誠実な人間として神の御前に誓って申し上げますが、御子息は、私が名実ともども知っているもっとも偉大な作曲家です。様式感に加えて、この上なく幅広い作曲上の知識をお持ちです。」・・・

この手紙からわかることはこの頃ののモーツァルトは、完成がぎりぎりになるほど多忙な日々を送っていたのである。残念なことにレーオポルトの手紙には、演奏会の素晴らしさに触れているだけで、聴衆の協奏曲の反応については何も触れられていない。

●交響曲 ニ長調　Sinfonie in D　KV95 (KV73n)

（作曲された場所・日付は不明, ただしケッヒェルは1770年4月、ローマで作曲としている）

Allegro, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

このシンフォニーはブライトコプフ社の資料館中に日付がなく自筆でもない手稿譜のみで伝えられた作品である。現在では、その手稿は散失あるいは破損している。旧全集で厳密な校訂報告が行われなかったため、我々は散失した手稿譜がどんなもので、どこに由来したかについて、闇に取り残される結果となってしまった。

【これこそ最初のシンフォニーか】

音楽学者のニール・ザスラウは、分類上は真偽不明としながらも、この曲が様々な点でモーツァルトの最初期の交響曲、すなわち西方への大旅行の過程でロンドンやオランダで書かれた（第1回～3回全曲演奏会プログラムノート参照）一連の作品と良く似ていることを指摘し、KV16以前に書かれた交響曲の一つではないか、さらにはトランペットを含んでいるところから考えてこの曲こそナンネルが「**最初の交響曲**」として回想しているチェルシー滞在中の作品ではないか、という仮説を示している。ここでそのナンネルの回想をご紹介しよう。（第1回全曲演奏会プログラムノート参照）

「ロンドンで、私たちの父があやうく死にかけるほどの病気にかかったとき、私たちはクラヴィーアに触れることは許されませんでした。そこで勉強のために、モーツァルトはあらゆる楽器・・・とくにトランペットとティンパニを伴う最初の交響曲を作曲しました。私は彼のそばに坐って、この曲を書き写さねばなりませんでした。」

PROGRAM NOTE

●交響曲 ニ長調 Sinfonie in D KV111/120(KV111a)

(15歳、1楽章、2楽章は、おそらく1771年8月 終わりにミラノで作曲、3楽章は1771年10月～11月 ミラノで作曲)

Allegro assai, Andante grazioso, Presto

【セレナータとその序曲】

このシンフォニーは、まずは序曲 ――この場合は劇的セレナータ《アルバのアスカーニョ》KV111の序曲 ――として生まれた作品である。原曲のセレナータは、オーストリア大公の結婚を祝して作曲された。

モーツァルトは1771年8月終わりにこの作品に取り掛かり、9月23日までにこれを完成させた。10月17日にミラノで行われた初演は成功を収め、その見事な出来栄えは、同じく祝典の一環として上演されたベテラン、ハッセの新作オペラの影を薄くしてしまうほどであった。

【シンフォニー化】

モーツァルトがこの序曲をコンサート・シンフォニーにしようと決心した際、彼は最初の2つの楽章をそのまま取り、合唱付きフィナーレをABAコーダという形式の簡潔なジークに置き換えた。モーツァルトの筆跡から、この新しいフィナーレの自筆譜が書かれたのは「おそらく1771年10月終わり、あるいは11月初めにミラノで」と考えられている。フィナーレの書かれた紙によっても裏付けられている。

この紙はヴォルフガングが第2回目のイタリア旅行中に主に使用していたもので、シンフォニー ヘ長調 KV112 (1771年11月2日)、ディヴェルティメント 変ホ長調 KV113(1771年11月)にも用いられているからである。

★参考文献 「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルト事典」海老沢敏著、
「モーツァルト」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルト書簡全集」白水社、
「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、